阿岐のまほろば Vol. 18

四日市！ 四日市!! 四日市!?

四日市遺跡　第１次調査（西条栄町・西条本町）

写真１　西条四日市の家並み

四日市遺跡は、西条栄町・西条本町に所在する遺跡です。西条駅前の土地区画整理事業に伴って平成10年度から発掘調査を行っています。

今回は、平成10年度と11年度の四日市遺跡の様子をお知らせします。

平成10年度の調査

10年度は、平成10年９月から平成11年３月まで発掘調査を実施し、A・B２つの調査区に分けて行いました。その結果、四日市遺跡からは、弥生時代から近世・現代までの遺構や遺物が多量に出土し、数千年に渡って人々が暮らしてきた様子が明らかになりました。それでは時代別に特徴を見ていくことにしましょう。

弥生時代：確実に弥生時代に遡る遺構は確認できませんでしたが、弥生土器と石器（磨製石斧・鏃など）が出土しています。

古墳時代・古代：須恵器のほか、古瓦が出土しています。素紋軒丸瓦と呼ばれているものと、布目の残った平瓦で、安芸国分寺に使われていたものとよく似ています。

中世：木簡が出土した井戸を検出しました。この木簡は、長期間風雨にさらされていたためか風食

写真２　調査風景

写真３　木製の水槽

が著しく、墨の痕跡はほとんどない状態でした。

内容は、文頭に梵字で不動明王「カーン」と不明の梵字を配し、以下、「国」がかろうじて読めますが判読は困難な文字が続きます。この木簡の用途などは残念ながら不明です。

近世：西国街道に面した江戸時代の町屋跡です。当時の人々が生活していた（私たちは“生活面とか文化層面”と呼んでいる）地面が何層も重なって検出されました。

また、陶磁器（有田を中心とした九州のものや瀬戸・美濃地方のもの、備前や砥部、地元の小谷焼なんていうのもありました。）とともに、大量の瓦が出土しました。瓦には、黒瓦とこの地方を特徴づける赤瓦が出土しており、黒瓦から赤瓦へと移り変わる様子がわかるかもしれません。

積み重なる生活面

上記のように、生活面が積み重なるとはどういうことでしょうか？

都市のように、同じ場所で長い間生活が営まれると、建物が古くなったり、道路などの区画が見直されたりします。また、（地震や火災、水害といった）大きな災害が起きたときも、町並みが大きく変化することがあります。

このように、生活環境が変わるときに生活面（地面）が変わることも少なくありません。そして、それまでの生活面を埋め立てて造成することによって、地面が何層にも重なっていくのです。

10年度の発掘調査では、現在の地面を取り除いた段階で、(1) 幕末～明治頃の生活面が出土しました。それから、下に向けて順々に、(2) 江戸時代後期、(3) 江戸時代中期、(4) 中世と古代、(5) 弥生時代と大きく５つの生活面を確認しました。江戸時代前期がないのは、（今回の調査区が）西国街道からやや外れているためと考えられます。

下の生活面が古く、上の生活面が新しいということは、地殻変動などによる上下逆転がないかぎり変わらない、大地の掟ですので、上の生活面から出土した土器は、下の生活面から出土した土器より新しいことがわかります。この法則を応用すれば、それまでいつ頃使われたのかわからなかった土器も、時代が判明することもあるのです。

このように生活面が幾つも重なった遺跡の発掘調査は、難しいところもありますが、それに見合った以上の成果もあるのです。　（T）

四日市遺跡位置図（1：50,000）

四日市遺跡　第２次調査（西条本町）

写真１　槽場遺構

江戸時代の醸造場を発見

平成11年度の調査

11年度は、平成11年５月から平成12年１月まで発掘調査を実施しました。調査区北側は江戸時代に整備された近世山陽道（西国街道）に面しており、調査区全体の形状も江戸時代の町割を反映して街道に直交して南北に細長くなっています。これらのことから参勤交代の制度にともなって整備された、四日市宿の遺構が見つかるものと期待されました。その結果は、紙幅を取りますので次号以降で報告させていただくとして、今回は酒都・西条に関連した、おもしろい遺構をご紹介いたします。

県内初の槽場遺構　写真１の遺構は調査区南側の江戸時代の生活面から見つかったもので、東西4.3m、南北3.6mの範囲の地面を深さ1.3mほど掘り込んでおり、その北西に直径40cmほどの電柱のような丸太が立てられ、その周囲は大きな川原石が敷き詰められていました。南側には民家の部材と思われるほぞ孔のある大きな材木が横たえられ、その表面は意図的に焼き焦がしてありました。一段高くなった西側には漆喰で塗り固められた四角い容器が据え付けられており、底には２枚の厚板が埋め込まれていました。

このような不思議な遺構は初めて見るので面食らって調査を進めていました。しかし後述するように付近から石組井戸や埋桶が見つかり、同じく酒処である灘（兵庫県神戸市）で近年発見された同じような例を検討した結果、この半地下式遺構は、「槽場」と呼ばれる醸造施設の一部ではないかと考えられるようになりました。

槽場とは醸しが完了した粕を含む酒もしくは醤油（醪）を布袋に詰めて搾り、製品として完成させる作業場のことです。今回見つかった電柱のような丸太は「男柱」といい、醪の入った袋に圧を加える加圧棒を固定するための柱です。男柱にはたいへんな荷重が加わるため、動かないように強

写真２　井桁状に組まれた材木

写真３　石組井戸

写真４　並ぶ埋桶

固に固定しなければなりません。調査を進めるとそれを証明するように、敷石の下からは男柱がぐらつかないように井桁状に組んだ材木（写真２）が見つかり、さらにその下には男柱の基部を左右から挟み込むように据えられた厚板と石が見つかりました。また、材木のわずかな隙間にはくさび状の木片を打ち込んで入念に固定していました。このような頑丈な構造でなければ醪を搾る時の荷重を支えきれなかったのでしょう。

敷石の南側の表面を焦がした材木の用途は不明ですが、やはり搾りによって生じる荷重に備えた地下構造と見られます。表面を焦がしてあるのは地下の湿気による腐食を防ぐためと思われます。

そして漆喰で造られた容器は搾りによって流れ出た製品を受けるためのものと考えられます。

では、この槽場で搾られていたのは醤油なのでしょうか？ 酒なのでしょうか？ 現在、容器の漆喰の分析を検討していますが、醤油の場合、漆喰の中に塩分が残っている可能性があり、その結果しだいで何が搾られていたか明らかになるのではないかと期待されています。

石組井戸と埋桶　調査区各所からは新旧25基の井戸が見つかりましたが、その大半が地面を掘っただけの素掘り井戸でした。しかし、槽場付近で見つかった２基の井戸だけは石を丁寧に組み上げて造られていました。写真３の井戸は直径1.5m、深さ２mと小規模ながら底面には板石が敷かれており、澄んだ良質な水を確保しようとした工夫が伺えます。また、槽場の北西側では並べて据えられた２つの埋桶が見つかりました（写真４）。桶は直径約1.2mを測る大きなものです。

これらはいずれも槽場の周囲約３m以内に位置しており、醸造に適した水を得るための石組井戸、醪を醸す桶、そして醪を搾る槽場と、醸造に必要な設備がすべてそろっていることになります。このことから、この場所は江戸時代の醸造場ではないかと考えられます。槽場を含めこのような遺構は県内初の発見であり、酒都・西条にふさわしい発見といえるでしょう。　(M. N)

㈶東広島市教育文化振興事業団　文化財センター報
阿岐のまほろば Vol. 18
発行日　2000(平成12)年２月10日
編集・発行　財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
東広島市西条町大字馬木541－1
TEL 0824－25－3880　〒739－0033
印刷　電子印刷株式会社
広島市中区堺町１－１－５